

# 京丹後移住促進プロジェクト ～新たな地方移住の仕組みづくり～

## 1 目的・概要

本科目は京都府京丹後市丹後町間人地区（以下：間人地区）をフィールドとして、学生が主体となって、別の都市・地域から間人地区で活動しようとする方々や地域に長年住み続けている地域の方々という多様な人々が協力し、「どうすれば地域の方々の“ふるさと 間人”に興味を持ち、移住してくるのか」という問いに対して仮説をたてて検証するということを繰り返し、“移住者促進を通じた地域創生”の仕組みを創るプロジェクトです。



間人地区は日本海に面している丹後半島の北西

側にあり、人口は約 2,000 人程度の漁村です。“間人ガニ”というブランドが存在するほど「蟹」の一大産地と知られています。昔は機織りも栄えていた町です。地形的な特徴として、港を中心とした“すり鉢状”に町が広がり、その奥には自然が残るといった「人と自然」がうまく調和した地域です。

しかし、昨今、間人地区を含む京丹後市全体の人口減少率と高齢化率は全国的に比較した際、非常に高い値となっています。特に、間人地区はこの傾向が京丹後市の中でも特に高く、約 43%の人が高齢者であることが判っています。

そこで本プロジェクトでは京丹後の移住者促進における課題を明らかにして解決することで、本プロジェクト活動後も間人地区において継続的な移住者促進、地域創生活動が行われるような仕組みづくりをすることを最終目標に決めました。

その最終目標の達成のために 1 年目では、間人の住民が自分たちの町に当事者意識を持って頂き、変えようとする気風を作り上げました。そこで得た成果を引き継ぎ、2 年目は地域内のコミュニティを活性化させることに重点を置き「まるっば間人ウォークラリー 2022」というウォークラリーを通して住民同士の交流のきっかけをつくり、地域内の活性化に繋げました。そして 3 年目である今年は今間人地区（京丹後市）の地域活性化に貢献し、地域の継続的な発展を生み出す“移住者像”を明確化することを今年度の目標にしました。

### Annual Schedule

2023 年	4 月	間人にて初のフィールドワーク（1 回目）
	5 月	現地移住者に対してヒアリング
	6 月	香川県直島訪問・戦略立案の専門家による講義
	7 月	間人にてワークショップ（2 回目）
	9 月	他地域への移住者の事例調査
	12 月	地域移住者・移住関係者へのヒアリング・間人にてフィールドワーク（3 回目）
2024 年	1 月	間人にてフィールドワーク（4 回目）



## 2 成果達成度

上記で述べた目標に対し、私たちは2つの成果を挙げることができたと考えています。

1つ目は、それぞれの分野で活躍しているボランティア人材（地域おこし協力隊の方をはじめとする地域活性化のための活動をしている方）を中心に、「観光の町」を軸として他地域連携を深め、町にかかわる人口が増えることによって観光事業者が参入し、間人のさらなる発展に貢献する、という仮説を作り上げたことです。間人の町に合った移住者は時代の変化に伴い、ボランティア人材→観光事業者（ビジネス関係者）→観光客へと推移すると考えました。



2つ目の成果は「観光の街」というコンセプトに基づき“移住者”と“街”の両側面を通して地域の緩やかな人口増加につなげるという10年以上にわたる長期的な全体計画と共に、その仕組みに関する仮説を作り上げたことです。間人地域は青の洞窟や立岩といった京都北部では有名な観光スポットがあり、将来性を持った観光資源が豊富にあることから間人地区の魅力を最大限生かせる街のコンセプトは「観光」であると考えました。すべての関係者が“街創造の構成員”となり、同じ目標に対して統一された認識を持ち、発展を遂げることで間人地域の魅力がさらに高まり、「観光」の活性化を通して交流人口を増やし、ビジネス関係者を誘致することで定住人口を維持、または増加させることが可能と考えました。

上記の私たちの仮説に対し、ワークショップの開催によって地域側としては観光に力を入れていく方面であるという回答が得られました。しかしながらそれを「移住」につなげるには情報発信や他地域との協力に加えて、引き続き地域内の協力関係の強化といった課題があることが顕在化しました。この課題解決のために私たち同志社大学京丹後移住促進プロジェクトの履修生達に一体何ができるのか、来年度に引き継ぎたいと考えています。



## 3 プロジェクトを通じて

地方の未来を真剣に考えるという貴重な体験を行うことができ、2つの気づきから私たちは大きな成長を遂げることが出来ました。

1つ目はグループワークを行うことの難しさです。週に一度の授業内だけではメンバー全員が納得し、統一された価値観を持って課題を考え、解決することが非常に難しかったです。そのため各々

が時間割を確認し、隙間時間を見つけ出し、zoom等を活用したミーティングによって意思疎通、状況共有を図ろうと努力しました。授業・授業外時間での話し合いを通じ、同じ価値観を持つということに苦勞しました。そこで私たちはチームを2つに分け、各チームに特化するべきテーマを与え、与えられたテーマの解決に個人のリソースを投入し、もう片方のチームや現地でワークショップに参加して下さる地域の方々には語弊を生まないために説明できるようになるまで必ず考える、ということを行い、この問題を解決しました。しかし、この方法はメンバーによって仕事量が増減し、個人の負担が増減するといった弊害を生み出してしまったと考えます。このことは私たちのチームにおいて反省すべき課題の1つだと考えます。



2つ目の気付きは、様々な年齢、立場の人と一緒にワークショップを運営する難しさです。4月のワークショップでは現地の方とどのような話をしたらよいかかわからず、自分たちが欲しい情報を得ることができませんでした。しかし、回数を重ねるごとにどのように工夫をすれば現地の方と打ち解けて話せ、期待以上の成果を持って帰ることができるようになるのかがわかるようになり、最後のワークショップである1月のワークショップでは大成功を収めました。

以上のことが当プロジェクトを通じ私たちの感じた気づき、反省、そして今後の私たちの成長に活かせると考える点です。そしてこの気づきというものは大学のほかの授業ではなかなか得られる機会のない大変貴重な気付きであり、今後私たちの成長の糧になると自信をもって断言することが出来ます。



#### 編集後記

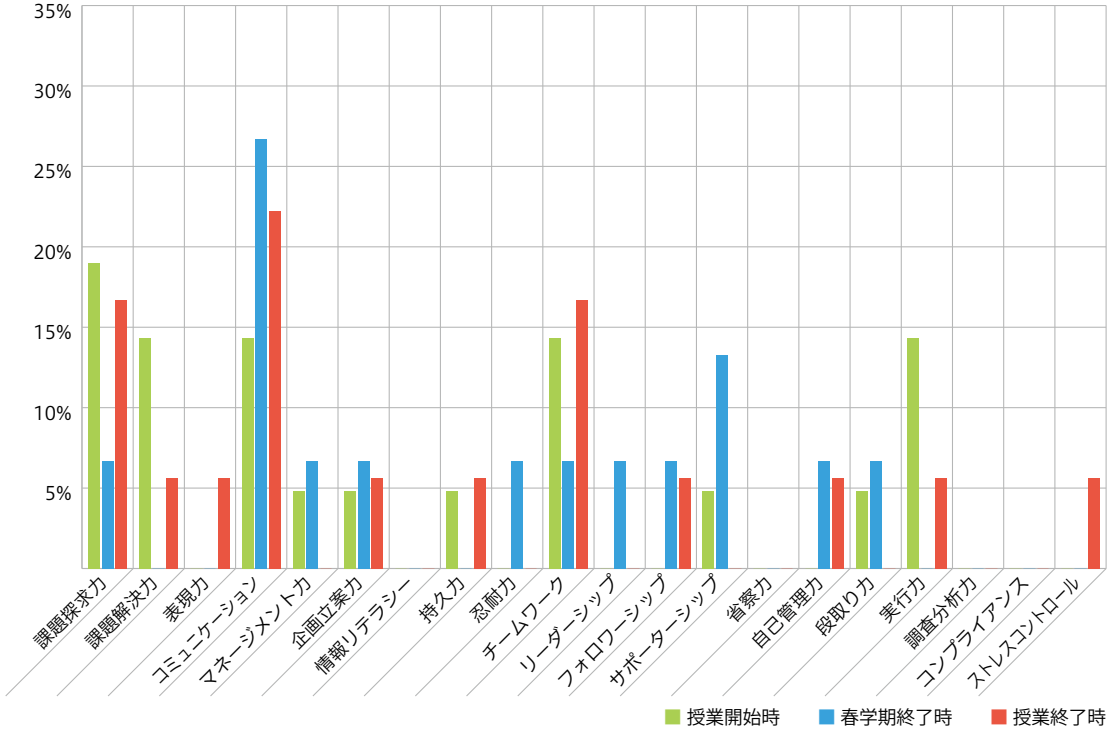
あっという間に過ぎ去った1年間、ありがとうございました。このプロジェクトが今年で3年目であり形として残るような大きな成果を残したい、という意気込みより生じた焦りからたくさん迷走し、メンバー内で対立を起し、そして次に進む、ということは何度も繰り返した1年だったと感じています。しかし、履修生全員で課題に対して真摯に向き合い、成果を作り出して行くということはほかでは得られないかけがえの経験でした。担当の泉川先生に波多野先生、SAの大野さん、現地での活動を助けていただいた京丹後市の皆様、そして3年目となる私たちを温かく受け入れ、ワークショップに参加し、意見をくださった間人地区の方々、その他関係者の皆様にメンバー一同感謝御礼申し上げます。1年間大変お世話になりました。

#### プロジェクトメンバー

河合 美南(文3) 内山 董(文3) 高島 忞成(法2) 小林 晴希(経済3) 春名 雄翔(経済2)  
小野 優輝人(政策4) 福元 萌(社会3)

## プロジェクト活動 アンケート集計結果

Q1. チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んでください。



Q2. プロジェクト活動を通じて実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んでください。

